Y4-35

災害発生時における医療機器・人員の新しい応援体制の構築

長野赤十字病院　看護部
○坂本（さかもと）　みすず、百束　晴美、関野　圭子、
野村　純子

【目的】A病院は災害基幹拠点病院に指定されている。多数患者を受け入れるためには、必要な医療機器を整備しなければならない。しかしA病院は必要な医療機器を災害センターに備蓄できていない。平成20年度は、国民保護共同実動訓練が実施され当院が受入れ病院に指名された。訓練当日が平日であった為、通常の外来診療は継続しながらの訓練を行うこととなった。必要な医療機器と人員が「災害発生」の放送で準備できるシステムを考え、訓練を行い有効性が確認できたので報告する。

【方法】1．病棟毎のエリア担当を決める。2．各部署の医療機器の搬入エリアを決める。3．搬入先のエリアの色で搬入物品を記載したカードを作る。4．マニュアルに記載し、周知徹底を図る。5．本部との連絡用紙の作成する。

【経過】エリア責任者の指揮・命令のもとにマニュアルに沿い赤エリアを立ち上げることができた。予め各病棟の応援体制、各部署への搬入物品リストを決め周知し、エリア別に色分けをしておいた事により、誰が見てもどこに搬入する物品かが一目でわかり、スムーズにエリアを立ち上げることができた。今回作成した連絡用紙を使用し、マニュアルにはない不測の状況を報告する事で、災害対策本部に必要な情報が速やかに集約された。

【結語】災害発生時に適切・迅速に動くには必要物品の確保・人員配置・連携強化は不可欠である。今回の訓練で、病棟からの医療機材・人材の応援体制でエリア立ち上げが可能である事が実証された。今回は予め訓練に向け準備してきたが、今後このシステムで実際に災害が発生した時に動けるかどうか検証を重ねていきたい。

Y4-36

看護師を対象としたICLSコース開催への取り組みと今後の課題

山田赤十字病院　看護部
○強力（ごうりき）　陽子（ようこ）、中尾　佳容、小林　美香子、
松本　ゆかり

【はじめに】当院では2007年9月から2009年1月までに、多職種を対象にした6回のICLS（immediate cardiac life support）コースを開催し、66名の看護師が受講した。しかし、これまでの受講者は自発的に参加した者のみであったため、部署別の受講人数に差があった。そこで、蘇生技術の部署別格差を是正するために、部署別養成計画を立案し、看護師を対象にしたコースを開催したのでその取り組みと今後の課題について報告する。

【コース運営の実際】1．第1～6回の部署別のICLS受講実績から受講者の少ない部署に対し、ICLSコースへの受講を勧めた。2．2009年3月23、24日の平日2日間で13部署から36名の看護師が受講した。3．院内インストラクタだけではコースの運営が不可能なため、院外医師らの協力が必要であった。4．受講終了直後にアンケート調査を実施した。

【結果】ICLSコースへの満足度は5段階評価にて、4.8であった。その理由として、「実技を中心とした繰り返しの実践が良かった」「急変時の知識の確認となった」「チームダイナミクスを学んだ」「継続した取り組みを望む」などがあった。

【考察】アンケート結果からは満足度の高い評価が得られた。しかし、当院では急変事例対応について事後検証システムが確立されていないため、ICLSコース受講が病棟急変例での蘇生率の向上につながっているかについては不明である。より多くの看護師がICLSコース等の救急標準化教育を受講することが望ましいと考えられるが、現在のところキャリア開発ラダーのレベル別支援研修としての位置づけが明確でない。今後は関連の委員会とも連携し、コース開催を重ねていきたいと考える。